岩手大学教育学部附属
教育実践・学校安全学研究開発センター

NEWS LETTER　Vol.4

国立大学法人 岩手大学
教育学部附属教育実践・
学校安全学研究開発センター

〒020-8550
岩手県盛岡市上田三丁目18-33
TEL：019-621-6637
E-mail：motoyama@iwate-u.ac.jp

2022年3月31日発行

目次

◇センター長としての2年間を振り返って　宇佐美　公生
◇2021年度の主な活動
◇研究紹介「岩手県内の特別支援学校における学校安全・危機管理の取組みと今後の課題」滝吉　美知香
◇連載・あの日を忘れない（3）「東日本大震災を振り返り、未来へつなぐ」加藤　孔子

センター長としての2年間を振り返って

岩手大学教育学部附属
教育実践・学校安全学研究開発センター長
宇佐美　公生

岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センターの開設から2年がたちました。東日本大震災の発生を契機に、学校における防災教育の研究は被災地の学校をはじめ全国で精力的に行われ、本学でも県内の教育関係者や専門家と連携し、防災教育やシンポジウムなどを開催してまいりました。しかし安全という視点で、学校という教育システムを総合的に考えたとき、災害から身を守ることだけではなく、生徒たちが遭遇しうる様々な危険を防止したり、備えたりする必要性とその教育のあり方に、わたしたちは着目してまいりました。そして自然災害、交通事故、児童生徒に対する犯罪、実験や実技での事故、いじめなどの課題に対してこれまで個別に行われてきた対策や予防教育などを総合的に検討し、生徒たちが安全に学べる教育環境の構築と生徒一人ひとりが安全に多面的に配慮して生きられる力の育成に向けた学術的研究の場として2020年、それまでの教育実践総合センターを改組し、本研究センターを開設致しました。

地域の特性上、当初は地震や津波から身を守るための防災教育実践の普及・啓蒙に力を入れてまいりましたが、本年度は大阪教育大学が進めるセーフティ・プロモーション・スクールの活動とも連携し、より包括的に学校の安全を推進するための取り組みについても研究の対象を広げたところです。

発足して2年ではありますが、基本的な安全教育の考え方の理解に加えて、個々の学校の立地条件を踏まえた具体的な取り組みや教科間の連携による総合的な安全学習の意義など、具体的な教育実践の事例の蓄積などを進めつつ、身体的、心理的安全への配慮の仕方など、教師側に求められる姿勢にも研究範囲を広げてまいりました。

そしてこの2年間はまた、新型コロナ感染症という新たな危険への対応の必要も生じ、関係機関との連携の点で制約を余儀なくされた2年間でもありました。しかし集うことに伴うそうした課題もまた学校安全を研究する上で、貴重な経験と捉え、今後はより総合的な視点から各種教育・研究機関との連携しつつ、学校安全学研究の充実に努めてまいります。

引き続き関係各種機関の皆様のご理解とご支援・ご協力をお願い申し上げます。

２０２１年度の主な活動

令和3年度教員研修会をオンラインで開催しました

6月19日（土）に教員研修会を開催しました。本研修会は岩手大学教育学部と岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センターの共催によるもので、「現在の教育課題について、講演等を通して研修を深め、教員等の指導力や授業力の向上に資する」ことを目的としています。

本年度は、岩手県教育委員会事務局学校教育室首席指導主事兼義務教育課長の三浦隆先生を講師にお招きし、「教員に期待すること」と題し、オンラインでご講演をいただきました。学習指導要領改訂の背景をはじめ、岩手の学校教育の重点や主な取組、これからの学校教育に求められる視点、そして教員に望むことを主な内容に、90分間、具体事例を交えながらお話をいただきました。この研修会には、現職の先生方、そして学生合わせ、約80名の参加がありました。参加者からは下記のような感想が寄せられました。

〇岩手県の学校教育における課題点や、社会的にこれから向上、発展させていくべき視点について分かりやすく説明していただき理解が深まった。教員をめざす上で、大切にしたい考え方や力を入れる部分について、自分の中で、より整理することができた。（20代大学生）

〇現在の教育課程編成の経緯や今後の動向などについて詳しく説明いただき、たいへん参考になった。オンラインということで安心して参加できた。（40代小学校教員）

〇初めてzoomによる研修会に参加した。講演をより身近に感じ、たいへん感激した。また、事前に研修資料を提供いただいたこともありがたかった。（50代小学校教員）

研修会当日の映像は岩手大学教育学部のホームページにより、現在も公開中です（下記QRコードからご覧ください）。研修会に参加できなかった4年生の学生からは、「教員採用試験の2次試験にとても役立った。」という感想も聞かれました。

2022年度も6月頃に開催予定ですので、奮ってご参加ください。

研修会当日の様子

教員研修会
アーカイブ配信

学校安全学シンポジウム2021を開催しました

11月27日（土）に「学校安全学シンポジウム2021」をオンラインセミナー方式で開催しました。4回目の開催となる今回は「安全に関する資質・能力の向上」をテーマとして、自他の生命の尊重を基盤とした安全に関する資質・能力の向上について、3名のシンポジストによる講演と参加者を交えた討議を行いました。シンポジストと演題は以下の通りです。

〇加藤　孔子（岩手大学大学院教育学研究科　特命教授）
「大震災を生き抜いた子ども達からの伝承」
〇山本　奬（岩手大学大学院教育学研究科　教授）
「なぜ児童生徒は教師に相談をしないのか―援助要請行動の阻害要因について考える―」
〇三浦　勇佑（石巻市立河北中学校　教諭・防災主任）
「学校安全推進体制の構築～SPS認証に向けた取組について～」

講演後の討議では「自分の命は自分で守る」ことが重要な防災教育と過度に自立を求めることが子どもの援助要請行動を抑制しかねないことの関連について検討し、学校教育における自立概念を問い直す契機となりました。

また、セーフティプロモーションスクール認証校の実践を踏まえ、同僚性に支えられた包括的な学校安全推進体制の構築とともに、学校と家庭、地域との連携によるセーフティネットを構築する重要性が共有されました。そして、学校だけでは子どもの命を守れないという前提で、家庭や地域との連携を図るうえで明確にすべき教職員の職能アイデンティティについて考える機会にもなりました。

学校安全学シンポジウム2021にご登壇いただいた各シンポジストによる講演動画及び事前配布資料は下記QRコードよりご覧いただけます。

事前配布資料

各シンポジストによる講演動画

アーカイブ配信していない学校安全学シンポジウム2021における討議の概要及び本センターが実施している学習支援ボランティアに関する報告は、『岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター紀要』第2巻に掲載しています（岩手大学リポジトリより近日公開予定です）。

研究紹介

岩手県内の特別支援学校における学校安全・危機管理の取組みと今後の課題

滝吉　美知香

特別支援学校が対象とする障害種は、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱の５つに大別されます。在籍児童生徒数全体は知的障害を中心に増加傾向にあり、重複障害を有する児童生徒数も増えています。障害種ごとに学校安全・危機管理の取組みが異なるというよりは、在籍児童生徒の身体や感覚、認知能力の状態等に応じて、具体的な予防策や対応策を講じて日々蓄積し、システムとして更新していくことになります。ここでは、岩手県内の特別支援学校10校から提供いただいた危機管理マニュアルの内容[1)]をもとに、特別支援学校における学校安全や危機管理の取組みと今後の課題について簡単に述べたいと思います。

まず、全協力校で細やかに整備されていたのが、児童生徒の行方不明時の対応です。先行研究において効果的といわれる、状況別（例えば登下校時、職員不在時、校外学習時など）の対応や、日頃のヒヤリハット事案を受けての見直し等が掲載されていました。県内では実際の行方不明事案も発生しており、各校で高い危機意識を持っていることがうかがわれます。また、登下校時の交通事故や、スクールバス運行時の災害・事故発生時についても、多くの学校が対策を整備していることが示されました。特別支援学校は、在籍児童生徒の発達年齢の幅広さや、居住地域の広範さも特徴です。岩手県は特に広大で市町村間の距離もあります。通学途中の避難所やAED設置場所の確認、困ったときに児童生徒が助けを求められるような地域とのつながりの確保などが必要となります。そのほか、感染症対策や摂食誤嚥などの保健衛生、および、地震や火災などの災害対応についても、詳細なマニュアルが作成されていました。前者については、免疫力の弱さ、てんかんやアレルギー、身体的動きの制限などがある児童生徒が在籍する場合には特に、日頃からの感染や誤嚥の防止、事故や症状が発生した際の緊急対応が重要となります。後者については、東日本大震災時の教訓を生かし、細やかな場面想定に基づく具体的で運用性の高い内容を、各学校の実情に合わせて工夫している様子がうかがわれました。今後は、避難所指定の有無にかかわらず、帰宅困難児童生徒や地域住民の緊急避難に対応できるような備蓄体制や運営マニュアルの充実が望まれます。

一方、全体的に今後の整備が期待されるのは、インターネットやSNS等の利用にかかわるトラブルや犯罪への巻き込まれ防止、児童生徒同士のいじめや家庭での虐待の防止や対応などでした。これらは、本県または特別支援学校に限定しなくとも、その対応の難しさが近年学校現場で課題となる領域でもあります。障害のある児童生徒が在籍する特別支援学校では特に、危機管理マニュアルの整備と同時に、児童生徒の実態に合わせた危機対応能力の育成をどのように教育カリキュラムに組み込んでいくかを考える必要があります。

知的障害のある児童生徒の場合、抽象的な概念がとらえにくかったり、学んだ知識を生活に応用しにくかったりすることがあります。そのため、知的障害教育に独自の指導形態である領域・教科を合わせた指導を中心に、生活に根差した教育内容によって生きる力を育む視点が重要になります。例えば、児童生徒自身が判断の難しさや不安を感じたときに、それを周囲に伝達し相談できる力を育むことや、「自分」と「相手」を大切にすることの重要性に根差した広義での性（生）教育の展開などが、人間関係トラブルの抑制・対応力につながるでしょう[2)]。今日徐々に取り組まれつつある、性教育や防災教育を体系化する試みや、具体的な指導実践報告等を参照しながら、自校の児童生徒に合わせた工夫のもとに実施し、それらを地域の学校どうしで情報共有し合い、特別支援学校の学校安全・危機管理の在り方を探っていく必要があると感じています。

また、家庭での虐待防止に関しては、子どもの障害に対する養育者の理解不足や誤対応が虐待につながってしまうことのないよう、特別支援学校教員の専門性をいかした子どもとのかかわりを、養育者に丁寧に伝えていくことがその第一歩になるでしょう。特別支援学校はその地域の特別支援に関するセンター的機能を有します。必要に応じてスクールソーシャルワーカーや医療・行政等と連携をとり対応していけるような体制を日常的に整備しておくことが求められます。

1)滝吉美知香・高橋亜湖・上濱龍也（2021）特別支援学校における学校安全・危機管理の現状と課題：文献研究をふまえた危機管理マニュアル調査および事例報告　岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター研究紀要、１、185-194.

2)滝吉美知香（2021）特別支援学校における学校安全・危機管理　教育展望、67（9）、31-37.

連載　あの日を忘れない（３）

東日本大震災を振り返り、未来へつなぐ

加藤　孔子

はじめに

2011（平成23）年3月11日は、私達には忘れることのできない日、忘れてはならない日です。多くの大切な人や物を一瞬にして失った悲しみ、不安、嘆きを決して無駄にしてはならないと思っています。

あれから11年の月日が経ち、今、学校には、震災の経験のない子ども達、震災の記憶のない子ども達、震災時の教育経験のない教職員が増えています。当然のことです。だからこそ教訓を後世に伝え、災害や事故から未来の命を守り、今をいきいきと生きる子ども達を育む教師教育としての大学の使命は大きいものと考えます。

1. あの日

2011（平成23）年3月11日㈮　私が校長として勤務していた釜石小学校は午前授業の日でした。子ども達の下校後、先生方と体育館で1週間後の卒業式のために準備をし、一段落した午後２時46分、巨大地震が起こりました。地鳴り、長い揺れ、いつもと違う揺れに内陸出身の私でさえ「これは津波が来る」と予感しました。約30分後の大津波襲来。釜石の街が、一瞬のうちに波にのまれました。

下校後の子ども達はどうしただろうかと心配しましたが、この状況では捜しに行くこともできません。避難所の準備、釜石小学校避難所対策本部の設置、深夜まで「寒いです。」と、びしょ濡れ、泥だらけで避難してくる人々の対応に奔走しました。

長くて寒くて不安な夜が明け、学校坂の下の変わり果てた様子に驚きました。瓦礫の山、横転した消防車やトラック、車、ヘドロのような泥・・・。目を疑いました。そのような中、私達教職員は、早朝から全校児童184名の安否確認に歩くことにしました。通れないところは山道を回り、二人一組となり手分けをして歩きました。無事でいた子どもを確認しては涙を流し、家を流された保護者に会っては涙を流し、無我夢中で歩いた時間でした。

１日目で184名中174名の無事を確認し、２日目で184名全員の無事を確認しました。3月13日午後３時２分のことでした。職員室に拍手が起こりました。下校後、家で一人留守番をしていた子、公園などで遊んでいた子、海岸で魚釣りをしていた子等々。一人一人が自分で判断し、それぞれ高台や避難場所に避難し、大津波から自分の命を守り抜いたのです。「奇跡だ！」と思いました。素晴らしい子ども達だと思いました。

2. 子ども達の命を救ったもの

子ども達の命を救ったものは何なのか。それは、震災前から行っていた釜石小学校の「防災教育」だと言えると思います。その内容は（１）ぼく、わたしの津波防災安全マップ作り、（２）下校時津波避難訓練、（３）防災授業の３つです。それぞれの詳しい説明はここでは割愛しますが、例えば、マップを作るときは、子ども達一人一人が自分の足で歩き、自分の目で確かめ、さらにみんなで話し合って作成しました。まさに「主体的で、対話的で深い学び」を通して「生きぬく力」を身に付けていたのです。学校で学習したことをしっかりと聴いて覚えていた子ども達の力、判断力、心が自他の命を救ったのです。

3. 教師、地域の力

その子ども達を育てたのは、釜石小学校の先生方の力です。「ぼく、わたしの津波防災安全マップ作り」「下校時津波避難訓練」「防災授業」を子ども達にしっかりと向き合いながら真摯に実践してくれた先生方がいてくれたのです。さらに、学校との連携の中で育まれた「地域の力」です。地域というあたたかく、豊かな土壌の中で、学校、家庭、子ども達がそして教職員が「One team」となっていたことを確信します。

4. 未来へ歩み始めている子ども達

私の教職生活の中で、最も悲しく、最もつらい卒業式は避難所の体育館で行ったあの時の卒業式です。子どもたちの多くは準備していた服も流され、着る物がなかったので、私達教職員も皆、ジャージや普段着で行いました。卒業を祝ってくれるはずだった親を亡くした子どももいました。胸が張り裂けそうでした。

あの時、ジャージで巣立った子ども達は今、社会人になっていたり、大学生だったり、それぞれの道をいきいきと歩んでいます。簡単に、いきいき生きてきたとは言えません。この10年、苦しくて、悲しくて、寂しくて、泣きたいこともたくさんあったはずです。津波の音、土煙が甦り、ＰＴＳＤを起こした子もいます。親を失い、ずっと元気になれない子もいました。でも10年という月日は少しずつ少しずつ子ども達を成長させてくれていました。震災を経験し、自分も命を守る仕事に就きたいと消防士になった子、避難所に巡回してきたお医者さんに「頑張ったね。」と声をかけられ、自分も医者を志すきっかけとなったという子等々。多くの困難を乗り越えながら、今を一歩一歩、一生懸命に生きているのです。

「『いわての復興教育』10年の成果は何ですか？」と問われたら、私は「この子ども達の姿です。」と答えたいです。10年後20年後の岩手の復興を担う人材の育成を目指してきた「いわての復興教育」はこの10年間、教育活動全体を通して、「いきる」「かかわる」「そなえる」という3つの教育的価値で、未来を担う「人」を確実に育んできたことを手応えとして感じています。

おわりに

「防災教育は、10年後に地域を支える大人をつくり、 20年後には地域の防災文化をつくる礎である。」

これは内閣府の「防災・減災、国土強靭化WGチーム提言」（R3.5）の一節です。あの時の子ども達が今度は自分達の地域の防災文化を創ってくれるだろうと信じています。東日本大震災でつらい経験をした岩手だからこそ、この経験と教訓を生かし、防災教育新時代を切り拓く強い情熱と総合的な人間性を兼ね備えた教員養成（人づくり）に取り組んでいかなければならないと切に思います。